宗像

みあれ祭（10月1日）

みあれ祭に先立ち 沖津宮御神璽迎え

十月一日のみあれ祭に先立ち、九月九日玄界灘の孤島・沖ノ島鎮座の沖津宮の御神璽をお迎えする沖津宮神迎え神事が厳粛に斎行され、沖津宮御神璽は中津宮本殿内陣に仮奉安された。

前日、葦津敬之禰宜以下神職五名が大島へ渡島、午後五時より明日の渡航安全祈願祭が斎行された。

翌朝、御座船となる「海久丸」（遠藤光浩船長）に、「國家鎮護」の大幟、御長手と呼ばれる紅白の吹流しが掲げられ、船首に波切御幣をつけ御神璽をお迎えする準備が整えられた。

午前七時、葦津禰宜以下神職、沖・中両宮奉賛会、同翼賛会役員、権田仁八郎海洋神事奉賛会長、宗像漁協大島支所の山口國一理事他

御座船「海久丸」

10月祭事暦

1～3日 秋季大祭

15日 月次祭
午前10時～
高宮祭
第二宮・第三宮祭
午前11時～
総社祭
豊栄舞奉奏

17日 表千家献茶祭
午前11時～

【大島・中津宮】
29日
沖・中両宮秋季大祭
午前 9 時～
沖津宮大祭
午前11時～
中津宮大祭

余滴

全国約八万の神社の本宗と言われる神宮の式年遷宮が平成二十五年に予定されている。神宮の式年遷宮は二十年に一度、社殿の立替、御装束・御神宝を新調して、新しい社殿に神様にお遷り戴く行事で、神宮で最も重要なお祭りの一つである▼この制度が制定されたのは、天武天皇の時代、六九〇年持統天皇の時代に始まったと言われる。途中、中世の頃、内乱により中断、延期があったものの、今回で六十二回目を迎える。以来約千三百年の歴史を有する▼さて、なぜ遷宮が行われようになったのか、この事に関しては諸説あるが、例えば建物の耐用年数や、当時の寿命や実働年数から二十年という年数が建築の技術を継承するに適当な年数であったとか。さらに建物が清浄さを保つ限度が二十年と考えられ、建物の耐用年数ではなく、宗教的あるいは精神的な年数であるとの考え方などその他多数ある▼遷宮に用いられる御用材はすべてヒノキ材であり、このことから推測すると、建物の耐用年数とは考えにくい。部分的な損傷は修繕を行えば十分に保てる。現在でも数百年を経ている社殿は稀ではない▼古来から、祭祀を行うに際して、神道は神聖な場所や清浄を最も重要にしている。新しい社殿をお造りし、神様にお遷り戴くことにより大神の神威を仰ぐ、それが遷宮本来の目的ではなかろうか。（杉）

遷宮で 結ぶ人の輪 心の輪
第六十二回神宮式年遷宮

神具・装束・授与品
井筒
装束店 〒600-8503 京都市下京区油小路通六条上る フリーダイヤル 0120-075-980
福岡店 〒812-0068 福岡市東区社領1-12-10-401 フリーダイヤル 0120-055-092
授与品店 〒601-8348 京都市南区吉祥院観音堂町23 フリーダイヤル 0120-075-820

木組の家 匠の技
総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元4丁目1-20 電話(0940)32-2567

関係者が集まり大島港を出港。

海上は凪ではあったが曇天、海路の半ば迄来たところで雨が降り出し同八時半頃に大雨の中、沖ノ島へ到着した。

到着後、雨の中を直ちに海で禊を済ませ、沖津宮本殿にて出御祭を斎行。祭典後、雨に濡れぬ様に神職が御神璽を捧持、一同慎重に参道を下りつつ御座船に奉安、一行は一路大島へ向かった。

正午過ぎに大島へ到着すると、多くの島民が波止場で出迎えていただく中、中津宮迄御神幸、その頃には大島でも雨が降り出したが、渡邉禰宜奉仕により同宮本殿で入御祭が斎行され、本年度の沖津宮神迎え神事は無事終了した。

尚、沖津宮と中津宮両宮の御神璽は、十月一日に海上神幸（みあれ祭）の上、お迎えの辺津宮御神璽と共に総社・辺津宮内陣に三宮の御神璽が奉安され、三日間に亘る秋季大祭が始まる。

祭典時

みあれ祭（10月1日）

第2回 氏子会総代総会開催
～氏子奉幣使は赤間西地区の福嶋光氏に～

九月二十日、本年度第二回目の氏子会総代総会が、置鮎会長以下、総代一〇一名の出席の下、清明殿で開催された。

議事では置鮎会長が議長に選出され、秋季大祭を中心とした議案の説明があり、原案通り承認いただいた。

秋季大祭氏子奉幣使については、旧宗像市地区の選出で承認いただき、後日本年度は福嶋光氏（赤間西地区）に決定したとが報告されている。福嶋氏には祭典前日の一日に神社で斎泊いただいた上で、二日祭にご奉仕いただく。

秋季大祭にあたり氏子会の皆様には、海上神幸（みあれ祭）にはじまり、諸々と御奉仕頂いている。神郡宗像に秋を告げる一連の祭事に、神社も地域の皆様と一体となって本年の秋季大祭を迎えたい。

元内閣官房副長官 石原信雄氏参拝

九月四日、元内閣官副房長官で現在野村證券顧問の石原信雄氏が参拝された。

石原氏は群馬県のご出身で、自治事務次官をはじめ、竹下、宇野、海部、宮澤、細川、羽田、村山の七つの内閣で内閣官副房長官を務められ、国家の為に尽力してこられた。

かねてより宗像大社への参拝を希望されており、現在も様々な要職を務められ御多忙な中、今回ようやく実現する事となった。

当日は正式参拝後、葦津敬之禰宜の案内で、第二宮・第三宮、高宮祭場を参拝、さらに神宝館も拝観いただいたが、こちらでは沖ノ島神宝に特に関心を示され、予定時間を過ぎる程、熱心に見入っておられた。

参拝後、高向宮司、葦津敬之・幹之両禰宜と懇談され、内閣官房副長官時代をはじめ、昨今の政治情勢についての貴重なお話しを頂いた。

石原氏の今後益々のご健勝をお祈り申し上げます。

石原信雄氏（左より3人目）

宗像大社菊花会 理事会開催

当大社境内で開催される西日本菊花大会に向けて最後の理事会が、九月九日県内外から五十名を越す理事出席のもと開催された。

当日は諸事項の確認の他、出品申込みの最終確認も兼ねており、各会からの報告がなされたが、猛暑の影響から発育に問題があるとして出品取消しが相次ぎ、七月に提出されていた出品予定数より下回る出品数となる報告となった。

この状況に事務局としては、例年並みの菊花展開催を懸念したが、各理事より年々観菊者が増え今年も多くの方々が待ちわびている菊花展の為に、出品できる会員は一点でも多く出品させようとの申し合わせがあり、事務局はもとより会員各位一丸となって協力し、菊花展を盛大裡に開催させる事が確認され理事会は閉じられた。

尚、各方面の御尽力を賜り、本年も十一月一～二十二日の開催期間で、多種多様な菊花が彩り鮮やかに境内を賑わせます。

主基地方風俗舞保存会 秋季大祭打合せ会

九月七日午後六時三十分より、主基地方風俗舞保存会「秋季大祭」打合せ会が、花田安輝会長以下保存会役員七名出席の下、斎館にて開催され、秋季大祭「一日祭」での奉奏に際し、温習日の決定、奉仕員の確認がなされた。

また、本年は久留米市に鎮座する高良大社（竹間宗麿宮司）より、十月十日の崇敬会大祭での奉奏の依頼があり、出向することが決まっており、当日の日程等、詳細について綿密な協議がなされた。

この主基地方風俗舞のあゆみや、高良大社で奉奏する趣旨については、紙面の都合上、次号にて大祭の御報告とあわせて掲載させて頂きたい。

神宝館特別展
「宗像大社刀剣展」のご案内

宗像大社神宝館では、御祭神へ奉納された刀剣を特別公開する展覧会を開催します。
刀匠の技の結晶を皆様是非ご覧下さい。

◆会　期　平成24年11月1日（木）～25日（日）
◆時　間　午前9時～午後4時30分
◆会　場　神宝館1階展示室
◆拝観料　大　人　500円
　　大学・高校生　300円
　　中・小学生　200円
　　★15名以上は1名に付100円引

※展示替え作業のため、
平成23年10月29日（月）～31日（水）、
11月26日（月）～28日（水）は、
館内の一部がご覧いただけない場合がございます。
詳しくは宗像大社0940-62-1311へお問い合わせ下さい。

第42回
西日本菊花大会のご案内

神郡宗像に菊の季節が到来しました。九州各県を中心に、全国の菊花愛好家が丹精込めて作り上げた銘花約三千鉢が、境内中に展示されます。この大会の最高賞は内閣総理大臣賞、この他に大臣賞が十一本授与され、別名「菊作り九州ナンバーワン決戦大会」とも呼ばれています。

期間中は、観菊者、七五三詣での家族連れなどで賑います。また菊苗・菊鉢の販売、勅使館をこの時期限定で特別に開放「抹茶コーナー」、豪華景品が当たる『菊みくじ』、宗像観光協会の運営する『いっぷく茶屋』なども開かれています。是非、御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

◆会　期　平成24年11月1日（木）～22日（木）
◆時　間　終　日
◆会　場　宗像大社境内
◆拝観料　無　料

第17回 出光興産（株） 中堅社員研修

出光興産（株） 人事部教育課

九月三～五日の三日間、第十七回中堅社員研修の宗像大社研修を実施させて頂きました。今回の研修には、国内各事業所の社員三十六名に、国外からはインドネシアの駐在社員一名、また聴講生として中国の現地事業所の社員一名の総勢三十八名が参加致しました。

本研修は「日常生活と離れた神域に身をおくことで感性を高めること」「創業者・店主出光佐三が多大な影響を受け経営の原点とした日本の伝統文化に触れその思いを感じ取ること」の二つを目的に継続実施しております。

高向宮司の開講挨拶

研修開始に際し、まず本殿で研修開始奉告祭を執り行いました。その後、高向宮司より「店主はこの神郡宗像で生まれ育ち、その中で養われた日本人の精神が出光興産の根幹に息づいています。その日本人の精神の原点は神道にありますので、皆様にはこの地で感じ気づいたことを糧とし、今後の出光そして日本を牽引して欲しい。」との講話を頂きました。

また、各神職の方々ご指導の下、白衣白袴の着方や祭式作法までご教示頂きました。

ほとんどの参加者が初めて経験であり、日常生活から離れた神域に身を置いているという実感もあり、自然と感性が高まっていくのを感じました。

二泊三日のスケジュールの中、神宝館見学、第二宮・第三宮・高宮参拝、御由緒の説明、雅楽鑑賞、神職の皆様との懇談と本当に多くの経験をさせて頂きました。

特に、神職の皆様との懇談では、神職の皆様の飾りの無いお話により、神道や宗像大社について理解が一層深まると同時に、日頃疑問に思っていることが解消できました。

研修生からは「非日常の環

第二宮での清掃奉仕

高宮での清掃奉仕

境と作法の中で、頭を真っ白にすることができ、日本人、そして店主のルーツに思いを馳せた。」「神道の精神は特別なものでなく、今も我々の日常生活に根付いていることを理解した。」「神職の方々の職務にかける真摯な『思い』とその『実践』を身近に感じ、感動した。」等の感想が寄せられた事より、店主が多大な影響を受け経営の原点とした日本の伝統文化に触れ、その思いを感じるという当初目的が達せられたと考えております。

参加者の事を親身に考え、お世話頂きました宗像大社の皆様には心より感謝申し上げますとともに、宗像大社の益々のご繁栄をお祈り申し上げ、研修の所感とさせて頂きます。

高宮での鎮魂

巫女の神楽を鑑賞

最終日の神社出発時

九州式内社顕彰会巡拝旅行

～国境の島、「対馬」の古社十社を巡る～

顕彰会発足後、初めての巡拝会が八月二十八～三十日の三日間に亘り、十七名参加の下、長崎県対馬を舞台に開催された。

式内社とは、平安時代の法令集「延喜式」の神名帳に記されている神社を指す。当時篤い信仰を受けた古社ではあるが、時代が経るにつれ現在では名も知れず衰退したお社も多い。そのような式内社を顕彰する事で神社神道興隆の一端を担うのが当会の結成目的であり、本年当大社を事務局に結成された。

出発日の二十八日、折しも台風十五号が九州北部に最接近しており、搭乗した飛行機が強風により対馬空港に着陸出来ず福岡空港に引き返すなどハプニングに見舞われたが、どうにか一行はその日の内に対馬へ入る事が出来た。

今回参拝させて頂いた神社は十社で、各神社では早朝より宮司様をはじめ総代の皆様一丸となって総出で台風の後片付けを行われたようで、一行を暖かく迎え入れて下さった。

対馬は海神である和多津美信仰、神功皇后が三韓征伐の折立寄られたという伝説から八幡信仰、対馬独特の信仰である天道信仰の三つの信仰が中心である。

天神多久頭魂神社

巡拝会では地元宮司様を始め総代の皆様とお話しさせて頂く機会があったが、対馬でも神社界の大きな課題となっている「後継者不足」が問題となっているようである。

さらに国境の島という事もあり、外国資本による土地の買収、外国人観光客の実態等、地元でないと聞くことの出来ない興味深いお話を多く聞くことが出来た。

今回の巡拝会で対馬の歴史・文化・人情に触れ、その魅力に再度対馬を訪れたいという思いは募った。

海神神社

平成24年度 学芸員実習開催

～県内の大学生五名が受講～

学芸員資格取得を目指す学生を対象とした学芸員実習が、本年も八月十五～二十五日までの間実施され、県内の大学生五名が受講した。

期間中、実習生は毎朝の朝拝式に神社職員とともに参列、清々しく実習に入るが、本年は初日が十五日の月次祭と重なり参列した。第二宮祭、第三宮祭、総社祭の各祭場で、実習生代表が玉串拝礼を捧げ一同は拝礼。初めて臨む厳粛な祭典に終始緊張したようだが、またとない機会に感激した様子であった。

講義は考古学（松本肇氏：沖ノ島祭祀について）、民俗学（石井忠氏：漂着物について、楠本正氏：海女について）、歴史学（河窪学芸員：古文書について）、博物館学（重住学芸員：神道博物館の意義と活動について）などを受け、宗像大社をとりまく歴史に触れつつ、刀剣手入れ（藤川宣重氏）、拓本採りや資料の取り扱い、展示作業（重住学芸員）などの実務も体験した。

また、宗像市からも行政の文化財保護への取り組みについて指導いただき、最後の締めくくりであった大島への渡島では、中津宮を正式参拝。さらに御嶽山山頂では、夏季では稀なようであるが沖ノ島を肉眼で拝することが叶った。

本実習で様々な知見を積み、現場の一端を体感した学生は、文化財保護や文化の啓発・継承に携わるといった学芸員の本質に迫ることとなり、学芸員への魅力は一層湧き上がったようである。

第35回 東西神社人親善野球熱田大会

～伊勢神宮チーム連覇。当チームは第四位に～

全国の神社人が野球を通して親睦を深める親善野球大会が、八月二十二～二十四日の三日間、熱田神宮（愛知県名古屋市）の当番で開催され、選手・関係者約一三〇人が参加、当大社は太宰府天満宮との合同チーム総勢二十一名で参戦し熱戦を繰り広げた。

当日は気温三十五℃と残暑厳しい中、開会式直後の初戦で東京チームと対戦。終盤に追い上げられるも辛勝して二回戦へ進み、前回優勝の伊勢神宮チームと対戦。先発の若手左腕の立ち上がりを攻め、先制点をもぎ取るもリズムの出てきた好投手を最後まで攻略できず、二回戦での敗退となった。

昼食後、別ブロックで敗れた熱田神宮チームとの三位決定戦に臨むも惨敗、今大会は四位に終わった。

尚、決勝戦は三大会連続で伊勢神宮と兵庫チームが対戦、その結果五対一で伊勢神宮チームが連覇を果たした。

来年は二十年に一度の神宮式年遷宮を迎え、斯界全体が多忙となるため二年間中断し、次回は平成二十七年に金刀比羅宮の当番での開催予定である。

（続）海の寄物

271

いしい ただし

戦艦「大和」は爆弾五発、魚雷十本を受けて沈没。先のレイテ湾の同形艦「武蔵」が魚雷二四本、爆弾十七発以上を受けて沈没。大和型戦艦の三番艦は急遽空母に改装された「信濃」は米潜水艦の魚雷四本を受けて沈没している。

男たちの大和、セット軍艦大名

三艦とも同形艦の巨艦であったが、時代の流れに取り残されてあえない最期であった。新鋭の軽巡洋艦「矢矧」も「大和」と共に防戦したが、魚雷七本爆弾十二発を受けて沈没した（魚雷・爆弾の数日米軍によって異なっている）。

昭和十七年のミッドウェーの敗北以後、制空権を失ない、またレーダーを開発した米軍に先に日本軍の動きを捕捉され、多くの艦船が南海に沈んでいった。八隻の駆逐艦のうち「磯風」「浜風」「朝霜」「霞」は沈没、「朝霜」は生存者なし、沈没の目撃者なしという悲運艦であった。「雪風」は三名の戦死者、「冬月」はロケット弾二発を受けたが被害は少なく死者十名。「涼月」は百名の戦死者を出した。「初霜」はゼロであった。

米軍が次々に大和にむかってくる

沈没をまぬかれた駆逐艦は「大和」「矢矧」の生存者の救助活動を行っているが、「冬月」に助けられた兵は艦内で地獄を見ている。「甲板は血の海のようで、バスルームには遺体が山のように積みあげられていた」という状況であった。助けられて死ぬケースも多かったという。

生きて帰って来られた兵にとって、心の中には後ろめたさを感じている。「戦艦大和ノ最期」を書いた吉田満は歌人岡野弘彦の短歌をよく唱えていたという。

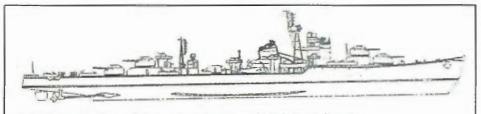
辛くして　我が生き得しは
彼等より狡猾なりし
故にあらじか

「俺は卑怯だったから生き残ったんだろうか」という自問の歌である。

歌人岡野は徴兵の経験もあり、B29の爆撃による多くの死者や市民の死も見て来ている。吉田満が唱えた岡野の歌は、生き残った人達にとって共通の感情だったという。

今夏もNHKで終戦特集の番組があった。タイトルは「巨大戦艦大和」だったと思うが、その中でもインタビューを受けた八十、九十代になった生存者たちは「この後ろめたさ」を語っていた。心の中では今も尚、残っていたのである。

さて軍艦防波堤となった艦は「旧軍史跡を歩く」（新人物文庫）によれば、福島県のいわき市小名浜築港に、駆逐艦「澤風」と「汐風」がコンクリートに覆われて完全に埋没しているのがある。汐風には色違いのタイルで艦尾部に埋設位置が示されている。同書には「このような旧海軍艦舶の防波堤利用は、これ以外に秋田港、東京八丈島神湊港、京都竹野港など国内数ヶ所に記録があり、昭和二十三年頃まで行われたようだが、その後撤去されている。いまでは福岡と福島の駆逐艦四隻がのこっているにすぎない」とある。東北大震災でいわき市の防波堤はどうだったろうか。



昭和20年（1945年）当時の涼月

左 涼月・右 冬月・コンクリートで完全に覆われた。

参考＝特攻大和艦隊（光人社）、戦艦大和（岩波新書）、日本軍艦百選（和田書店）、日本の軍艦駆逐艦（光人社）。

第六一四回 宗像大社歌会詠草

大西晶子選 毎月25日〆切

宗像市　土穴　山本　静子

不思議とも然々おもう災害の無きは宗像大社のおかげと

評 宗像は自然災害が少ないが、感謝する作者が好ましい。〈不可思議なまでに災害少なきは宗像大社のおかげと思う〉とした。

北九州市　八幡西区　豊田　光子

手すさびに拾ひたれども石は石何もかわらぬ吾は吾なり

評 齢を重ねても私は私だ、と強く思う作者か。上の句の石との関係が少し分かりにくいが四句を〈月日たちても〉としては。

福津市　若木台　山崎　公俊

心字池のめぐりの樹々を大摑みして揺らすかな雄風の吹く

評 擬人法を使い、風の勢いを表現した爽やかな歌。樹を揺らしているものが何かが解るように、雄風を早く出せると良い。

うきは市　浮羽町　向　則正

避難所に肩寄せあひてにぎりめしひとつを貰らひ一息つけり

評 この歌の前には水害から避難する歌があった、避難時の緊張感がようやく解けた安堵感が握り飯の具体に表れている。

宗像市　日の里　石松　弘次

洗濯もの持ちゆく度に病む妻が無理せぬ様にと逆に言いたり

評 夫人は入院中なのだろう。労わりあうご夫婦の愛情が感じられる歌。結句は〈われを労わる〉としてはどうだろう。

福津市　中央　池浦千鶴子

昼寝する我をたしかめ出でゆきし夫の足音やわらかく消ゆ

評 昼寝の邪魔をせぬようにとの夫の心遣いに感謝する作者。結句の〈やわらかく〉が作者の気持ちをうまく表現している。

福岡市　南区　井田有久衣

公園のすみにひっそり「さるすべり」気ずく者なく紅の花咲く

評 目立たぬ花に心を寄せる作者。四句と意味が重なる二句は〈～丈低き〉など描写に。四句は〈気づく〉、三句の括弧は不要。

福津市　星ヶ丘　佐々木和彦

朝の間は月のそがひにリングなす日輪今し海へちかづく

評 金環蝕の歌。今回の日蝕は朝だったので初句は〈この朝を〉、三句〈リングなし〉、結句も日没と間違わないように〈海上に照る〉としたい。

宗像市　池田　森　龍子

庭園の一畳がほどの石の面白く乾きて秋づく気配

評 繊細な感性。二句は〈一畳ほどの〉。三句・四句表記を〈～の面しろく～〉に。面白と続くと別の意味に読まれてしまう。

宗像市　田久　巻　桔梗

宗像のむかし話に腹かかふ転入者の腑にも方言落ちて

評 転入者の作者も方言で語られる宗像の昔話に大笑いしたのだろう、方言ならではのニュアンスが理解できた喜びの歌。

宗像市　田久　田中　國廣

良き短歌できしと勇み投稿す二、三日経てば粗の目立ち来

評 よくあることだ。やや説明的なので時間経過ではなく歌を中心にし〈良きできと勇み投稿せし短歌二・三日経て～〉と。

宗像市　日の里　大和美由紀

厄除けの瓢箪ずらり掛けられて梅雨の最中に黴一つなし

評 神社だろうか、沢山並ぶ奉納の厄除け瓢箪。梅雨なのに黴一つないと見た、作者の視点が女性らしく個性的。

福津市　若木台　野間　精一

五尺にもとどかむとするホウズキを妻貰ひ来て門につるしぬ

評 この酸漿は愛宕神社の酸漿祭りで配るものか。厄除けか病気封じならばそれが分かると良い。旧かなでは酸漿はほほづき。

選者詠

七つの海越えて日本に来しといふ南瓜を切りて汁の実とする

土のにほひ風のにほひのする言葉ぼうぶらと母は南瓜を呼びき

第五八八回 俳句作品集

宗像市　日の里　石松　弘次

糖漬や亡き母偲ぶ今宵かな

宗像市　日の里　花田いつ枝

花火会帰路渋滞のUターン

編集後記

今年のメジャーリーグは日本人選手が一味違います。一年目の青木選手とダルビッシュ投手が、既にチームの中心選手として大活躍▼一方でベテランといえども結果が全ての厳しい世界で、メジャーリーガーの誰もが一度は袖を通したいとされる名門球団ヤンキースと一年契約。サムライスピリットと評される強靭な精神力と、ボールを打者の手元で微妙に動かす投球術で、三十七歳ながら現在エース級の活躍をみせるのが黒田博樹投手です▼さらにイチロー選手も加わり、この二選手が日本人の培った「野球」の最高レベルを屈指し、これから始まるポストシーズンに臨みます▼三十半ば過ぎという同世代の感情も入り混じり、多くの勇気と愛国心をいただきたいと思います。これは外国の大使館に物を投げ込んだり、店舗を襲う国の愛国心と異質なのは言うまでもありません。（塚）

発行所 宗像大社社務所・宗像会
住所 〒八一一―三五〇五 福岡県宗像市田島二三三一
電話 （〇九四〇）六二―一三一一（代）
発行人 葦津 幹之
編集人 大塚 宗延・鈴木 祥裕
制作・印刷 ゼネラルアサヒ
毎月1日発行
定価1年送料共 1,000円